

# ぼくたちは忘れない。

標茶高校の生徒たちが見た東北のいま。



2011年3月11日に発生した東日本大震災。あれから3年が過ぎ、標茶高校の生徒たちは被災地の現状を知るため視察に行きました。そこで、生徒が見た被災地の状況や、復興に向けての課題など被災地の話を聞きました。

(参加した生徒) 蝦名玲奈、鈴木耕治、蛭名紘大、須崎環奈、林裕大、澤井聖茄、富田雄貴、八ッ橋京一郎、長部梨奈、後藤謙太、小渡拓、佐藤美咲、高橋翔平、手塚未来、佐藤梨菜、村上知加、森本沙紀、庄野克基、熊谷瑠衣、以上19人

(敬称略・順不同)

被災地視察に参加しようと考えたきっかけを教えてください。

以前から被災地を自分の目で見て学びたいと考えていました。そんな中、今回の研修を知り、迷うこと無く参加することを決意しました。

研修の中で一番印象に残っている事はなんですか。

岩手県野田村の町並みが印象に残っています。復興が進み始めている場所と津波の被害によって建物が流されてさら地になってしまった場所がはっきり2つに分かれています。それを見て、津波の力の凄さと復興は簡単に進めることができず、完全に以前のような町並みを復活させるにはまだまだ時間が必要なのだと感じました。また、宮城県石巻市にある大川小学校も強く印象に残っています。視察した場所の中で一番被害が多く、震災で発生した津波の影響で校舎が大きく壊れていました。そこに居たくさんの生徒や先生は、どうして逃げるのができずに亡くなってしまったのだろうか考えると、とても怖くなりました。



生徒たちが見た被災地の光景

被災した方との交流で何か感じたことはありませんか。

自分たちが想像できないような経験をしていることを被災された方との会話を通して感じました。地震や津波に対する災害の恐怖がとても強いようで、震災で家族を失った方の悲しみや、孤独など会話を通してつらい気持ちが私たちに伝わってきました。そして、同行してくださったバスガイドさんも被災されています。バス会社が被害に遭ったそうです。しかし、震災から3年が過ぎ、いつまでも暗い気持ちで落ち込んでいるわ

けではなく、会社を立て直すという目標のため、前に向かって歩き出しているのとこのことでした。

研修を通して何か心境の変化がありましたか。

研修に参加する前は、テレビを見てみると、復興は進んでいると思っていました。しかし、実際に行ってみると津波の被害の跡や、震災で人が住んでいない場所がとても多く、メディアの情報のみではなく、実際に被災地を自分の目で見て、震災について考える必要があると思えました。

被災地に対して自分たちができることは何かありますか。

募金を集める活動が必要だと感じました。震災から3年が過ぎ、テレビなどで募金活動の情報を見る機会は減っています。しかし、復旧はまだ完全ではないので、これからも募金を集める必要があると思います。また、ボランティアなどの活動に参加する機会があれば参加していきたいです。

最後に被災地を見て、皆さんに伝えたいメッセージはありますか。

テレビなどのメディアでは被災地の復興が進んでいると伝えられています。しかし、小さな町では、震災当時のままの場所が多く、実際に行かないと被災地の現状について知ることができないと思います。私たちが震災について自ら進んで情報を得ようと考える意識を持つことが復興への力になると思います。ま

た募金活動などの、被災地に対しての支援をこれからも継続して活動していくことや、東日本大震災の経験を生かし、新たな防災対策を考えていく必要があると思います。最後に私たちは、震災で亡くなられた方の死を無駄にしないため、東日本大震災を決して忘れず、次の世代へと受け継いで行くことが大切だと思います。



大川小学校で犠牲になった方に祈りを捧げる生徒



視察で感じたことを話してくれた小渡さん、佐藤さん、手塚さん